海龍王寺の調査

―第314-12次

調査地は、第95－2次調査の西側に隣接し、平城京左京一条二坊、海龍王寺の北辺および一条条間路南側溝にあたる（図126）。東西３ｍ、南北12ｍの調査区を設定し、南に１ｍ、南側３ｍ分で東に１ｍ、西に畦0.5ｍを挟んで1.5ｍ拡張した。調査面積は50㎡、遺構確認面は標高67.8～67.9ｍ前後である。

検出遺構　第95－2次調査で検出した一条条間路南側溝SD1150の延長を３ｍ分検出した（図127）。第95－2次調査の所見同様、溝は２時期ある。下層の溝がある程度埋まった後に、幅を広げて掘り直している。上層は幅1.4～1.8ｍ、下層は幅約1.2ｍで遺構検出面より深さ約0.3ｍである。Ｙ＝－17.561ラインで、上層溝の両岸がＸ＝－145,275.1および－145,277.1、下層溝がＸ＝－145,275.7およびＸ＝－145,276.8、溝心がＸ＝－145,276.2である。また、SD1150に平行する東西溝SD7914を調査区南で検出した。SD1150とは溝心々間で約６ｍ離れる。時期は不明。その他、近世以降の形成とみられる瓦敷状の落ち込みSX7910や、土坑３基（SK7911、SK7912、SK7913）等を検出した。

出土遺物　古代から近現代までの土器・瓦が出土した。SK7913から四重弧文軒平瓦が出土した。これまで法華寺旧境内や左京八条三坊（姫寺跡）から出土している瓦と製作技法のほか、胎土・色調・焼成の特徴も一致する。またSX7910からほぼ完形の羽釜も出土した。ほとんどの遺物はこのSX7910から出土している。

まとめ　一条条間路南側溝を確認した。一条条間路北側溝の事例は蓄積されつつあるが、南側溝は第95－2次調査に次いで２例目である。条坊の配置が特殊な法華寺周辺の解明という点で重要な知見を得ることができた。一方、第95－2次調査で海龍王寺北方の築地塀もしくは区画施設とされていた柱列の延長は、検出できなかった。現地表面から遺構検出面までの深さは第95－2次調査とほぼ同じであり、遺構が削平された可能性は低い。このため、イ）今回の調査区は金堂のほぼ真北であり、門の存在と関連する、ロ）第95－2次調査の遺構解釈の再検討が必要、の２案が考えられる。今後の調査事例の増加を待ちたい。

（馬場　基）

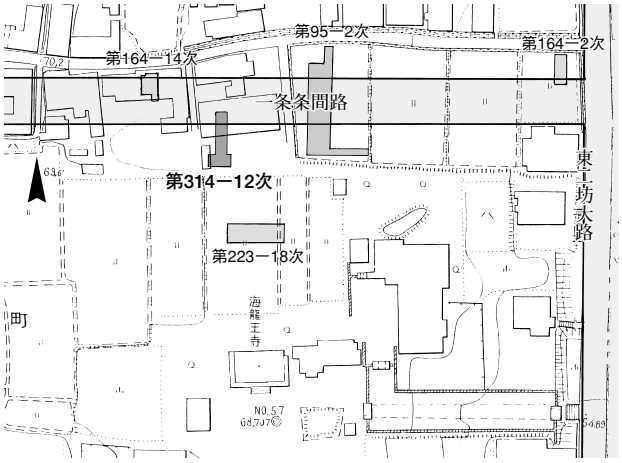

図126　第314－12次調査区位置図

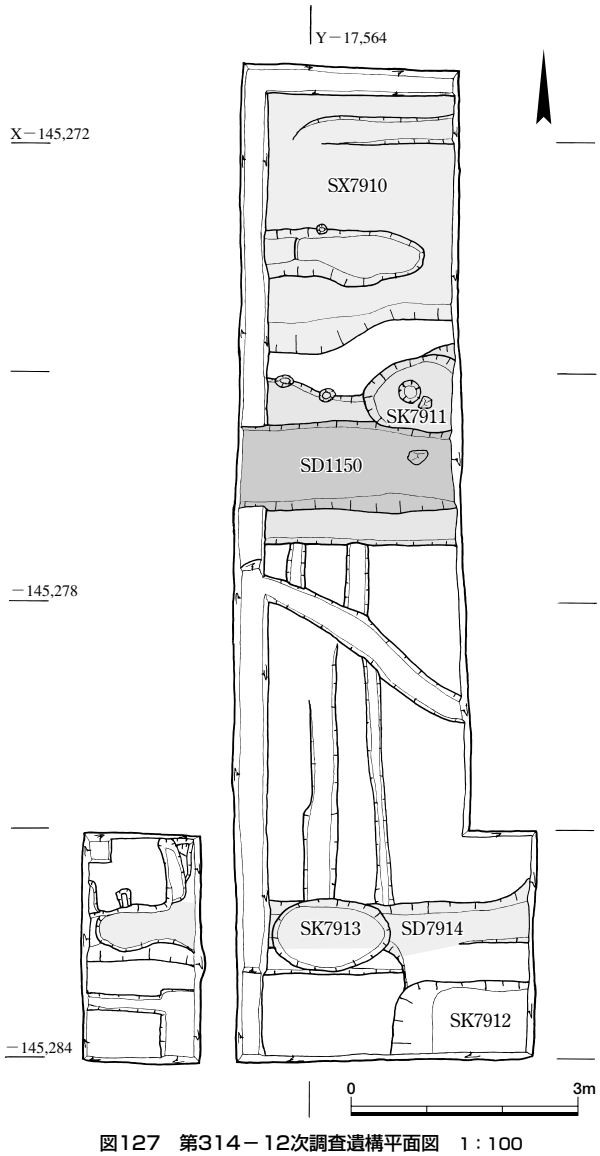

図127　第314－12次調査遺構平面図　1：100